

英語の構造
—その奥に潜む原理—
— CONTENTS —

はしがき

第1章 英語から言語学へ	1
1.1 はじめに	1
1.2 音に関する素朴な疑問 — 第2章への序奏 —	2
1.3 単語に関する素朴な疑問 — 第3章への序奏 —	3
1.4 文に関する素朴な疑問 — 第4章への序奏 —	4
1.5 意味に関する素朴な疑問 — 第5章への序奏 —	10
1.6 談話の解釈 — 第6章への序奏 —	13
1.7 社会との関係 — 第7章への序奏 —	14
1.8 心理との関係 — 第8章への序奏 —	15
1.9 英語の歴史 — 第9章への序奏 —	18

第2章 音の構造	23
2.1 音声学	23
2.2 音変化の規則性	30
2.3 同化	34
2.4 韻律	36
2.5 きこえの役割	44

第3章 語の構造	51
3.1 はじめに	51
3.2 語と形態素	51
3.3 語の構造	58
3.4 語形成の方法	61
3.5 まとめ	75

第4章 文の構造	77
4.1 統語論とは何か？	77
4.2 統語論の目標	77

4.3	英文法はどのくらい完全か？	78
4.4	統語論の分析法	78
4.5	生成文法による英語の分析	94
4.6	統語論と言語能力ー英語学と言語学ー	109
4.7	普遍文法ー英語から全世界の言語へー	110
4.8	英語学・言語学の新展望ーミニマリストプログラムー	111

第5章	意味の構造	115
5.1	はじめに	115
5.2	意味論的直観と様々な意味関係	115
5.3	語彙の意味	121
5.4	形式意味論	130
5.5	構文と認知	145

第6章	談話の構造	151
6.1	談話と語用論	151
6.2	発話行為論	153
6.3	会話の含意	159
6.4	前提と会話	163
6.5	関連性	164
6.6	直 示	172
6.7	ポライトネス	180

第7章	言語と社会	185
7.1	はじめに	185
7.2	社会言語学的发展	185
7.3	社会言語学の領域	187
7.4	言語変種	189
7.5	言語変種の諸概念	195
7.6	sexismとracism	197
7.7	結 び	203

第8章	言語と心理	205
8.1	はじめに	205

8.2	言語獲得	205
8.3	統語解析	214
8.4	脳とことば	217
8.5	バイリンガリズム	220

第9章 英語の歴史

9.1	はじめに	223
9.2	古英語期以前	223
9.3	古英語期 (450-1100) の英国	224
9.4	古英語の文法	227
9.5	中英語期 (1100-1500) の英国	232
9.6	中英語の文法	233
9.7	近代英語 (1500-1900)	240
9.8	英語史から見た現代英語	242

章別推薦図書	245
参考文献	247
索引	251

はしがき

人間の言葉がきわめて複雑で高度な抽象構造物であることに我々はほとんど気がついていないのではないだろうか。言葉は人が生まれte数年すると、教えられもしないのに話せるようになる。気がつくて無意識で使てきるようになつてゐる。人間が無意識で行うことはたくさんある。息をする、目で何かを見る、立つて歩く、耳で何かを聞き理解するなど、あげればきりがなゐ。これらの行動は非常に複雑な筋肉運動、それを指示、管理する脳神経細胞、それを誘発する体内での分子反応など、驚くほど高度で複雑な生物学的作用のたまものである。

機械工学の発達で、二足歩行するロボットがお目見えするようになってきた。ペットロボットも販売されるようになった。留守の間に自動的に掃除してくれるロボットも出てきた。言葉で普通に話しかけると反応するロボットも現れた。これらのロボットは複雑な行動が可能になつており、人間に多少近づいたと言える。これらが我々の日常生活に入り込み、普通になる日もそう遠くはなさそうである。

では、これらのロボットがなぜこのような人間と同じような行動がとれるのか、一般の我々は知つてゐるであらうか?もし、故障したら、直し方を知つてゐるであらうか?どうしたら人が希望する行動をしてくれるロボットが作れるのか知つてゐるであらうか? 勿論、答えは No! である。自由に使えるからといつて、そのものの本質を知つてゐるとはいへないのである。言葉がまさにそれである。

人は言葉を自由に操る。操れはするが、その本質は全く意識してゐない。宇宙の真理に匹敵する(あるいは上まわる)複雑さを持つてゐるが故に、それを意識することが出来ない。本書は言葉の背後に潜む構造を明らかにすることを目的として書かれた英語学、言語学の入門書である。英語学、言語学の理論や考え方を紹介し、それらを用いて身近な映画や小説の英語を例に親しみを持つて理解してもらへるよう書かれたものである。

各章の中には *A Tip for Thinking* という囲み記事がちりばめられてゐる。いずれも映画や小説からとつたものである。理論を理論としてだけ理解するのはなく、実際の英語を通して、言葉そのものとしても理解してもらいたいために入れたものである。

本書の執筆者はすべて京都外国語大学から巣立つてゐた若い研究者達である。編者が初めて Noam Chomsky から質問に答えてくれた手紙を受け取つてから20数年になる。その間に探求心旺盛な学生が数多く英語学、言語学、特に生成文法(当時は変形文法)を勉強し研究者の道に進んで行つてくれた。すべて

編者を踏み台とし、さらなる一步を踏み出してくれた者たちである。

【執筆者】

小野隆啓 (Ono, Takahiro)	京都外国語大学外国語学部 (第 1 章 英語から言語学へ)
山根典子 (Yamane-Tanaka, Noriko)	ブリテイツュコロソピア大学 大学院言語学科 (博士課程) (第 2 章 音の構造)
小野尚之 (Ono, Naoyuki)	東北大学大学院国際文化研究科 (第 3 章 語の構造)
近藤 真 (Kondo, Makoto)	静岡大学情報学部 (第 4 章 文の構造 4.5-4.8)
藤本幸治 (Fujimoto, Koji)	京都外国語大学外国語学部 (第 4 章 文の構造 4.1-4.4)
蔵藤健雄 (KuraFuji, Takeo)	琉球大学教育学部 (第 5 章 意味の構造 5.1, 5.2, 5.4)
田畑圭介 (Tabata, Keisuke)	金沢学院短期大学 言語コミュニケーション 学科 (第 5 章 意味の構造 5.3, 5.5)
桐生和幸 (Kiryu, Kazuyuki)	美作大学生活科学部 (第 6 章 談話の構造)
島田将夫 (Shimada, Masao)	福山平成大学福祉健康学部 (第 7 章 言語と社会)
松岡和美 (Matsuoka, Kazumi)	慶應義塾大学経済学部 (第 8 章 言語と心理)
神谷昌明 (Kamuya, Masaki)	豊田工業高等専門学校 (第 9 章 英語の歴史)

言葉の神秘は尽きることなく、理論も次から次へと移り変わっていく。言葉の科学的研究が始まってまだ半世紀ほどしかたっていない。言葉のおもしろさ、その背後に隠れている原理の美しさを追求したいと思う新たな若い世代の誕生に一役買えれば、本書の目的は十分に果たせたものと言える。

2 0 0 4 年 3 月
小野 隆啓

第1章 英語から言語学へ

1.1 はじめに

英語という言語はおもしろい、それでいてやっかいな言語で、学ぶ者に数多くの疑問を持たせる言語だと思う。英語に限らず、外国語というものは、**母語** (native language) とは異なった環境のもとに、異なった歴史、文化の上に成立し発展してきたものであるから、おもしろく、やっかいで、多くの疑問が出てくるのは当然である。多くの人にとっては中学校で初めて英語というものにふれるわけだが、発音、文字、文法、意味、そしてその背景にある文化など、日本のものとは大違いである。英語を学び始めて、我々が持つ**素朴な疑問**をいくつか考えながら、それらの**素朴な疑問**に答えを与えてくれる**英語学** (English linguistics) ・ **言語学** (linguistics) の世界に入っていこう。

1.2 音に関する素朴な疑問 —第2章への序奏—

まず、英語の音について考えてみよう。**母音** (vowel) 一つとってみても日本語なら「あ」一つしかないのに、英語だと、日本人が「あ」に近いと感じる発音には[æ], [ɑ], [ʌ], [e], [ə]などがある。この区別を練習し獲得しなければなら
ないのだから大変である。文字と発音の関係にしてもこれまたやっかいである。a という文字が使われている場合、hat の a の発音のようにいつも [æ] と発音できるの
ならいいのだが、hate になると [ei] に変わるし、saw になると [ɔ], chocolate では [ɪ], care では [eə], などなど。文字の「あ」は「あ」としか発音しない日本語からすると、本当にやっかいな言語である。

英語には母音だけでなく日本語にはない**子音** (consonant) が数多くある。[f] や [v] は「下唇を噛んで発音せよ」、[θ] や [ð] は「舌を噛んで発音せよ」と習う。bird の [ə] は舌を巻けだの、とにかく日本人の感覚からすれば、「舌にサーカスをさせる」がごときである。

日本人の英語の発音練習を皮肉った次のような笑話がある。「ある日、イギリスのある田舎町での話である。優雅にも馬車で田舎のどこかな道を、イギリス人、アメリカ人、そして日本人の3人が旅行していた。はじめは話に加わらなかつた日本人も、二人の話に興味を引かれ会話に入つた。ところが、少しすると日本人の口からは血が流れ始め、イギリス人とアメリカ人はびっくり！ What's wrong? と尋ねる彼らに Nothing, I'm all right. と答える日本人。事情



を聞いてみると、日本では、英語の発音を教える時、fとvのような子音は下唇を、そしてthの場合は舌を、「囁む」と習っており、それを忠実に守って発音していたところ、馬車が走っているのが田舎の舗装もされていないガタガタ道なので、fの音を発音しようとした時に、ちょうど石に乗り上げそのショックで下唇を切り、またthの音を発音しようとした時に、同じく石に乗り上げそのショックで舌を切り、血が流れ始めたという。話を聞いていたイギリス人とアメリカ人は、口からあごを血だらけにした日本人を、ただ呆然と見守るばかりであった。その見守る二人のアメリカ人とイギリス人の口からは一滴の血もにじんできていた。」

[f]、[v]、[θ]や[ð]は日本語にない音なので、ある意味問題ないが、実は日本語と同じだと思っていて、実際には違う発音の仕方をしている音の方がやっかいなのである。例えば日本語の「す」と英語の[su]は同じだと思っている人がほとんどであろう。次の話はある外国語大学で実際にあったことである。

英会話が必修科目になっている大学での話である。担当のアメリカ人教師は非常に教育熱心ではあったが、言葉が厳しく、本来なら人権問題にもなりそうなきつい言葉で学生を叱責することでも有名な教授であった。発音指導を中心に授業が進められ、ほとんど毎回小テストが行われた。テストは、学生を一人ずつ教卓に呼び、発音をチェックするために用意された単語のペアを、いくつか発音させるというものであった。そのテストの中で学生たちが一番不平を訴えたのが[s]と[θ]のペアであった。実際に課されたテストでは、sinkとthinkを発音するというものであった。このテストで、ほとんどの学生が[θ]は発音できているが[s]の発音ができないと、悪い点をつけられたのであった。

そのような学生の中の一人がクラス担任の教授に、「今まで[f]や[v]、[θ]や[ð]が正しく発音できていないと言われたことはあっても、[s]が発音できていないと言われたことはありません。あの教授は本当にアメリカ人のですか？」と涙ながらに訴えてきたのである。

学生の言い分はもつともなように思われる。しかし、実は間違っているのは学生なのである。上の状況のように発音のテストの場合、いくら大学1回生の学生でもthinkは舌を噛み発音するぐらいのことは心がけてテストに向かうものである。したがってthinkという語の発音で失敗することはむしろないのである。しかし、sinkの場合は、今まで誰にも注意されてこなかったし、英語の[su]と日本語の「す」は同じだと思っていたことが、実は間違いなのである。

このように、英語にはあって日本語にはない音は多少の注意と練習をすれば発音できるようになるが、日本語と同じ音だと思っているが実際には少し異な

る音の方が見逃されやすく問題なのである。

また、教師側の**発音記号** (phonetic alphabet) そのものに対する理解が間違っていることも多い。例えば、[ə]の発音をどのように理解しているかはかなり問題である。これは筆者の実験の体験であるが、中学の時 tomorrow という語を習った時、その時の教師はこの単語を「タマロウ」と発音するように指導した。理由は、この語の発音記号が[təmɔːrəʊ]であり、下線部の発音記号は bird という語の発音記号の[be:rd]と同じだから「ア」なんだというのが理由であった。これは明らかに発音記号に対する誤解から生じたものである。

boyの発音記号を見ると[boɪ]となっている。これだけ見たら「ボーイ」と発音すべきで「ボーイ」のような長音にはならないはずである。bedやbagも発音記号上に長音記号(:)は入っていないのに、petやpackとはちがひ、長く発音される。これは「**有声音** (voiced sound) に囲まれた短母音は半長音長くなる」という音声学の規則があるからである。

最近の英語教育では、口語英語を教えることが多い。口語英語の発音上の一つの特徴として、2つの単語を結合して発音上ひとつの単語として発音することがある。例えば、次のようなものである。

- (1) a. is not $\rightarrow$ isn't b. have to $\rightarrow$ hafta c. going to $\rightarrow$ gonna
d. got to $\rightarrow$ gotta e. want to $\rightarrow$ wanna f. used to $\rightarrow$ usta

このような現象を縮約(contraction)という。縮約の中で歌などによく出てくるものに want の縮約形である wanna がある。次の例は Michael J. Fox 主演映画 *Back to the Future* の一場面である。

- (2) BIFF
:Don't be so gullible McFly...
(ワカワライ、簡単に引っかけられるじゃねえよ。)
- GEORGE
:Okay.
(わかったよ。)
- BIFF
:I don't wanna see you in here again.
(お前の顔なんかここで見たくなんかねえからな。)
- GEORGE
:Okay. All right. Bye-bye.
(ああ、わかったよ。バイバイ。)

この wanna 縮約は want と to が隣接していれば一般的には可能な音韻規則であるが、want と to が隣接さえしていればいつも可能であるというわけではない。次の例を見よう。

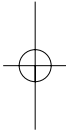
- (3) KATHARINE : I really don't think that's a variable. Tess, you know, you don't get anywhere in this world by waiting for what you want to come to you. You make it happen. (*Working Girl*)
(それはないわね。テス、いい？この世の中では、待ってるだけじゃ何も起きないの。自分自身で行動を起こさないと。)

上の例では want と to が隣接しているが、実は want と to の間には what がもともと存在しており、「wh 語は文頭に移動させる」という英語の文法規則のために移動した結果、want と to の間に **痕跡 (trace)** というものを残していると考えられる。母語話者はこの痕跡を無意識のうちに認識しており、痕跡が want と to の間にある場合 wanna 縮約はできないことを知っているのである。実際映画の中で発音では want に強勢が置かれている。

時代が変わり、中学校で初めて英語にふれる際の教科書の出だしも変わるものである。今ではそんなことはないが、筆者が中学で英語を学び始めた時の教科書では、Lesson 1, §1がThis is a pen.から始まっていた。そしてこの文を何回となく発音練習させられたため、英語の文を読む時は、この文のアクセント、抑揚パターンが英語の基本形なのだと思った。そのため、John hit Mary.のような文を読む時も This is a pen.と同様、主語に一番強いアクセントをおいて読んでいたものであった。

John hit Mary. という文を発音する時は、特別な強調などが入らない限り、Maryに第1アクセントが来るものである。このことは英文を読む時の基本となる知識である。thisとかthatという単語は特別な**焦点 (focus)**を当てるものであるから、これらの単語を含む文は、基本的なアクセント、抑揚パターンを代表する文ではないのである。

今では中学や高校にALTと呼ばれる母語話者が教壇に立って、学生たちが生きた英語にふれられるような機会が与えられている。そのALTの人たちから「なぜ日本人はThere is a girl in the room.の場合のthereの発音がおかしいのか」と言われることがある。一般に日本の英語教育では**there構文 (there-construction)**、あるいは**存在文 (existential sentence)**と呼ばれる構文に出てくるthereと、John went there.に現れるthereが違うことが教えられない。



there 構文に出てくる there は品詞は **名詞 (noun)** で、意味は持たず、発音は [ðəɪ] でありアクセントは置かれない。一方 John went there. の場合の there は品詞が **副詞 (adverb)** で、意味は「そこに(で)」であり、発音は [ðeəɪ] である。この事実是一般の辞書にも書いてあることなのだが、ほとんど気づかれていない。したがって、there 構文の there も副詞の there も同じように発音するため、ALT の人たちに発音がおかしいと言われるのである。

英語の発音を詳しく研究する英語学の分野を **音声学 (phonetics)** といい、音声に関するいろいろな現象を科学的に説明する分野を **音韻論 (phonology)** と呼ぶ。これらの専門分野を若干理解するだけでも数多くの素朴な疑問に解答が得られるものである。第2章で議論される。

1.3 単語に関する素朴な疑問 — 第3章への序奏 —

文を構成する最小の単位は単語である。しかしこれは何も意味の最小単位が単語であるということとは意味しない。単語より小さい意味単位というものが存在するのである。英語の単語で最も長いものとして **pneumoultramicroscopic-silicovolcanokoniosis** (塵肺症) という単語があげられることがよくある。45文字もある単語である。しかし実際にはこれが最長の単語ではなく、「トリプトプアソ・シンセターゼ A タンパク質^{*1)}」という化学物質の名詞はなんと1913もの文字数を要する。このような長い単語を覚えることは基本的に不可能であるように思える。しかし、不可能であるならなぜ存在するのであるうか。

英語の単語は26の文字からなっているが、よく見てみると長い単語でも、いくつかの部分に分かれていることがわかる。上で見た塵肺症にしても以下のような部分から構成されている。

- (4) pneumono- = lung
- ultra- = beyond
- micro- = small
- scopic- = to see
- silico- = flint, quartz (珪素)
- volcano- = fiery, as from a volcano
- conit- = dust
- osis = a diseased condition

^{*1)} Lederer, R. 1989. *Crazy English: The Ultimate Joy Ride Through Our Language*. Pocket Books: New York. pp.41-42を参照。